

絵本の中の家族

一月刊物語絵本『こどものとも』にみられる家族意識—

武田 京子

(岩手大学教育学部)

1. はじめに

子どもが与えられる文化財の一つである絵本は、テキスト作者、イラスト画家、編集者、読み手などの複数の大人が深いかかわりを持つ。それらの大人が「意識する」、「意識しない」にかかわらず、様々なメッセージが子ども達に発信される。子どもの日常生活の場として大きな比重を占める家庭生活や家族がどのように描かれているか、を分析することによって家族意識の変化を考察した。分析の資料として用いたのは、『こどものとも』創刊号(1956.4)から537号(2000.12)である。

2. 家族意識の変化

落合、西川らの家族社会学の分野では、家族意識について「近代家族」と「現代家族」に区分されている。

「近代家族」とは、封建的で家父長的な旧民法下の「家」に規定されていたものに対応して戦後生まれてきた「個人の尊重・男女同権」を理想とした家族である。しかし、実際生活では、「近代家族」とそれ以前の「家」的要素が併存し、「ほのぼのとした家族愛に包み込まれた大家族を家族の理想」とするイメージが存在していた。近代家族は親密性と私秘性を備えた家内の家族であり、家庭の内と外を明確に分離することが近代家族の基礎にあった。ウーマンリブ世代の女性達が最も高率で専業主婦になって近代家族の完成を目指した。「家」制度的家族と近代家族への分離の時期は1975年である(落合, 2000)

「現代家族」とは、出生率の低下、婚姻率の低下、離婚率の上昇、同棲の増加、婚姻外出生児の増加などがセットになって発生したことによって誕生した。欧米先進国では1970年代後半から始まっている。わが国では、出生率は1960年代から低下し始め、離婚率は1963年に戦後最低、1984年戦後のピークを迎え最近再度上昇傾向、事実婚の普及によって同棲は社会的に承認され、1990年頃より婚姻外子の法的地位向上も見られる。古い結婚観や家意識に縛られないカップルが共通の目的や考えに基づいて、正式な婚姻届を出さないで暮らす方法を取り始

め、周囲もそれを容認するようになってきた。

3. こどものとみに表れた家族像及び家族意識

(1) 近代家族以前—共同体の中に組み込まれた家族
『ふしぎなたけのこ(87)』は、服装から中世の共同体の日常生活で、ある家族に一大事が起これば成員全体が団結する姿を描いている。また、戦後の家を構成単位とする村共同体の中での子どもの生活を描いた『さんねんごい(340)』、『はるまつり(350)』、『のらっこ(379)』、『ゆきあそび(394)』は1949年生まれの菊地日出夫(作・え)の長野における少年時代をもとにつくられている。仲間の交友関係の土台には家父長制の家族があり、大人にも共同体のメンバーとしての責任意識が存在している。

『あかちゃんのはなし』(134)は、明治生まれのおじいさんの誕生にかかわる行事が語られる。命名の由来、名付け親、初節句、菖蒲湯など行事としては残っているものの、家族意識の変化に伴い現代では意味が変化していることが読みとれる。

『ちょろりんのすてきなセーター(369)』、『ちょろりんとつけー(414)』は祖父のいる大家族と周囲の大人達やおじさん一家との関係を描いた作品である。甘やかしてはない子どもへの理解を示す祖父、おじさん、いとこなどとの親類づきあい、主人公の気持ちをくみ取り手助けをする周囲の大人達の姿勢には、血縁地縁を基盤とする近代家族成立以前の家族意識が見られる。

(2) 近代家族の成立

新しい憲法に理想像として掲げられた夫婦を中心とする核家族が多く見られるようになった。男性(父親)は家庭の外へ働きに出かけ、公的な分野を中心に活動する存在となり、女性(母親)は家庭内で家事を行う性別役割分業が確立した。また、意識面での核家族化の進行は、老人の存在を子どもの日常生活から分離させた。

①働きに出る父親と家庭内をまもる母親

産業構造の変化に伴い、雇用労働者増加し、父親の労働する姿はこどもにとって身近なものではなくなった。絵本の中で父親が語られるときは、「働く人」と強調されるようになった。サラリーマンの父親の生活(『おとうさん(339)』)ばかりでなく、『おとうさんをまっつ(429)』では、単身赴任か長期出張なのか汽車に乗って仕事に出かける父親が描かれている。

雇用労働者の増加は、サラリーマンに付き物の転勤という現象をもたらし、子どもの世界にも当たり前のこととなった。『とんこり』(361)は引越先で新しい友達が出来るまでを描いた作品である。

夫婦が協力するはずの開拓地に働く家族でさえも、『かいたくちのみゆきちゃん』(44)では主に働くのは父親である。母親(女性)は、家族のために家事をする存在であることが強調される(『たろうのおでかけ』(85), 『かわいめんどり』(136))。女性の社会進出に伴い仕事を持つ女性(母親)も登場するが、仕事をしている姿は描かれない。

『せんたくかあちゃん』(269)は家事の一つ洗濯が大好きな母親を描いている作品である。洗濯を家族のための主婦の仕事と位置づけるのではなく、自分自身の自己実現の一方策としてとらえている。わが国のウィメンズリヴ運動がピークを迎えたのは1970年代であるが、前述のこの世代の女性達が近代家族の完成を目指し最も高い率で専業主婦になった事の現れと判断できる作品である。

②老人の存在

家父長制家族で尊重されていた存在であった老人は、核家族の離れた存在として扱われるようになった。わが国も1970年に高齢化社会へ突入し、独居老人及び夫婦のみの高齢者は増加傾向にある。平均寿命の男女差、夫婦の年齢差から見ても無配偶者老人は女性の方が多く独居老人の8割は女性である。最近の寿命の伸びや家庭電化の進行、食品文化の変化によって男性の独居老人も増加傾向にある。老人にかかわる社会状況は、絵本の世界にストレートに描き出されている。昔話(『おおきなかぶ(74)』など)や拡大家族の中での老人(『あかちゃんのはなし』, 『りょうちゃんのあさ(150)』)として描かれていたものが、一人暮らしの寂しいお年寄りとして描かれ(『おばあさんのすぷーん(165)』, 『のんびりおじいさんとねこ(196)』, 『いちごばたけのおばあさん(206)』), 自立した老人像(『あめふり(338)』などのシリーズ, 『おじいさんのつるつるかぼちゃ(506)』)へと変化してきている。

子どもの目から見た老人像は、日常生活を共にする存在ではなく、長期の休みに遊びに行く存在(『やこうれっしゃ(288)』, 『クロてがみをかこう(423)』, 『いすうまくん(424)』, 『やまがみさまのゆきがっせん(490)』, 『こびつちよさんのやま(509)』)かスープの冷めない距離に住む存在(『たつくんのおみせばん(374)』)となった。身近にいる老人は子どもにとっては理解しにくい存在であることを示す作品としては、『かなとおばあさん(434)』がある。

(3) 現代家族の登場

結婚観、その他前述のような家族にかかわる状況

の変化に伴い、従来の家族意識にとられない作品がつくられるようになった。両親がそろっていることにとられない子どもの生活が描かれる。『ねぼすけスーザのおかいもの(419)』, 『ねぼすけスーザとやぎのダリア(438)』, 『ねぼすけスーザとあかいトマト(470)』, 『ねぼすけスーザのセーター(501)』はマリアおばさんと一緒に住む主人公の物語である。二人の関係については文中では何も述べられず、主人公はおばさんや近隣の人との生活の中で自立していきだろうと予測させ、過去の地縁血縁による共同体とは異なる共同体が子どもの成長に必要であることを示唆している。

『まゆとおに(517)』は山姥の娘が主人公である。母親である山姥と二人暮らしである。きちんとしつけられている様子が言葉や態度の端々に見られる。『こどものとも』の年中向きであるが『まどをトントン(1999.5)』ではおとうさんと娘の就寝前の様子が描かれる。この二作についても単親家庭であるかについては言及されていない。

②家庭内のことに積極的にのかかわる父親

意識及び実面核の核家族の定着により、家事育児の従来の性別役割分業を見直さなければならなくなった。社会的な調査によれば男性の家事参加の時間数はまだまだ低い。絵本の世界では、ごく自然に描かれるようになってきている。『おやすみなおちゃん(457)』, 『ともこのかいすいよく(497)』がその例である。女性作者の理想が作品に反映し、読者としての母親から好評を得ている。

③家族の重要なメンバーとしての子どもの存在

家族観の変化は家族の一員としてのこども観へも変化をもたらした。子どもを一人の人間として時には大人と対等に扱う視点も出てきた。赤ちゃんが産まれお兄ちゃんになる主人公に対して無理に兄役割をとらせるのではなく、誕生までの一緒に時間を待つことで先に生まれた事に対して優越感をもたせている(『あかちゃんがやってきた(511)』)。

4. まとめ

社会の変化によって生まれてきた新しい家族観は作品製作に影響を与えていることがわかる。また、過去の家族観の中にも現在の視点から学ぶべきものは多い。何を子どもに与えるか、読み手としての大人の選び取る能力が要求されるであろう。

参考文献

落合恵美子『近代家族の曲がり角』(角川書店, 2000)